

万助小舎(酒田市営山小舎)の話

鶴岡北高校山岳部コーチ 鈴木 理夫

1 万助という人は誰？

鳥海山のふもと遊佐の吉出集落の佐々木万助という方の名前です。明治15年に亡くなっていますが、没年齢等は不明です。山で炭焼き等をして生活していたようです。当時は鳥海山の信仰登山がまだ盛んな時代で、蕨岡口(現在の横堂～滝の小舎～河原宿～頂上)と吹浦口(概ね現在のブルーライン～大平～御浜～頂上)が山形県側の代表的な信仰登山の登り口でした。どちらの集落にも大物忌神社があり、明治初期にはどちらが優位かをめぐり、蕨岡側が明治政府に訴えたこともあります。これは、信仰上の格付けの問題でもあるのですが、訪れる信者がもたらす経済的な利益をめぐる争いでもありました。万助さんは新道を探し、掛け小舎(現在の万助小舎付近?)で茶屋などをやりながら、現在の万助道の土台となるルートを確認させていったと思われます。龍ヶ滝(万助小舎の北東部にある滝)神社のお札の版木が残っていたので、万助さんは商売的な才覚も持ち合わせた人だったと推測できます。

2 なぜ現在の万助小舎はできたの？

世界の最高峰であるエベレスト(チョモランマ)の初登頂は1953年のことでした。太平洋戦争の敗戦後、国民の生活も安定する中で日本にも登山ブームが広がり、多くの人が山に出掛けるようになりました。ヒマラヤの8千メートルの未踏峰マナスルに、敗戦国である日本の登山隊が挑戦を重ね昭和31年に世界初登頂を果たしたことは、国民にとって大きな誇りになりました。山に関心が高まる世の中の動きを受け、昭和30年に酒田二中に山岳部ができました。多くの部員を抱え活発な活動をするようになり、他の中学校にも続々山岳部が誕生しました。昭和20年代には飽海地区で酒東だけだった高校山岳部も各学校につくられていきました。

一方、鳥海山では昭和27年に開催された国民体育大会のため、滝の小舎(現在の小舎は2代目)と大平小舎(取り壊され現存しません)が建設されていました。しかし、どちらの小舎も酒田市内からは時間を要するため、土曜の午後から登ることを前提にして、酒田から半日で登れる場所に小舎が欲しいとの声が高まりました。陳情活動等の結果、酒田市営山小舎建設に向け検討を重ねることになりました。条件としては、悪天候でも到達・帰還が可能で水場があること、積雪期になだれの危険がないこと、四季を通じて利用できるいろいろなコースがとれること等が考えられました。候補地として①万助小舎跡 ②万助道渡戸 ③三の俣～月山森ルートの標高600m付近 ④鶴間池畔を検討した結果、万助小舎跡に建設することになりました。期成同盟による各方面への働きかけから、市議会で設置が可決され遊佐町と営林署からの承認も得ることができました。

建設促進を目的に寄付金を集めるため、募金鉛筆の作成や山岳映画上映も試みて、市に当時としては大金の30万円程を寄付することになりました。当初は昭和35年に建設する予定だったのですが、陸上競技場の整備を優先させるため、一年遅れの昭和36年(1961年)の8月に建設工事が始まり11月に落成式を行いました。小舎の管理運営は市営山小舎管理委員会に委ねられ、実質的に飽海地区高体連登山部が担当してきました。

3 万助小舎の特色はどんなところ？

万助小舎のそばの湧き水で、冬でも枯れない豊かな水です。冬山や春山でも雪を掘り起こせば、流れる水が顔を出します。その味は豊富な水で知られる鳥海山の中でも、私は一番だと思います。まるやかで鉱物臭のない水は、そのまま飲んでも美味しいのですが、お茶やコーヒーなどの飲み物、麦切やそうめんなどの麺類をゆでてでもその味の良さがわかります。一説には名水で知られる胴腹の滝の源流ではないかと言われています。

また、管理の行き届いた気持ちのよい小舎である点も特色です。無人の小舎はどこか荒れた印象を受け、時には不安を感じる場合が珍しくないのですが、万助小舎はいつ訪れても快適に過ごせる小舎です。また、以前は高校生も年間使用料があったのですが、現在は無料になっています。

ストーブの有無で小舎の印象はだいぶ変わるのですが、建設当初からストーブが設置され積雪期でも快適に過ごすことができます。森林限界の近くに位置しているため、遊佐町方面の展望、笙ヶ岳や月山森方面の眺め、満点の星空などが楽しめる点も特色だと思います。

4 万助小舎が長持ちしているのはなぜ？

万助小舎は今年で62年目を迎え他の小舎より長持ちをしています。現在の滝の小舎は昭和62年に再建されました。滝の小舎は冬季間猛吹雪の吹きさらしになり、すき間に雪が入り込んでしまうことが劣化の原因になったと聞いたことがあります。万助小舎は冬季間雪に包まれます。春山合宿で万助に行った際に驚いた経験があります。万助平に着いたのに小舎が見当たらないのです。よく見ると地面から少しか盛り上がった部分があり、もしやと思って掘ってみたら小舎の煙突の最上部が出てきました。その時は部員が二人ぐらいの少人数で、顧問二人と力を合わせてようやく2階の窓の部分だけ掘り出し、疲労困憊だったことを思い出します。雪に覆われることで、小舎は強風から守られてきた面があります。

万助小舎は石炭、鍋などの炊事用具、掃除用具、修理用の建築資材などを、高校の山岳部員や顧問が分担して、荷上げをしてきました。その中で行き届いた維持管理ができてきたことが、長持ちしている最大の理由だと思います。酒田工業高校の顧問で長らく小舎の管理に携わった日坂晃治先生は、万助小舎の担当になった時に「まるで自分の山小舎が出来たように喜んだ。」と25周年記念誌に書いています。その中で遊佐高の改築により不要になった現在の流し台を担ぎ上げた苦労や、煙突や屋根の修理についても記載されています。日坂先生以外でも万助小舎に対し情熱を注いできた酒田光陵高校の前顧問石垣先生など多くの山岳部顧問の尽力や、各高校歴代山岳部員達の貢献により現在に至っています。なお、昔は顧問の車に乗せてもらうことはほとんどなく、鳥海山に登る一番安い方法は酒田から電車で遊佐駅に行き、そこから万助に登ることでした。湯の台方面はバス代がかかるため、万助小舎の利用頻度が高く、修理箇所の早期発見等も長持ちの一つの理由になったのかもしれませんが。今後も、皆さんに利用してもらうことが一番大事だと思います。

<参考文献>

『万助小舎～酒田市営山小舎25周年記念誌』

山形県高体連飽海地区登山部 1986年(昭和61年)

『積雪期登山基礎技術講習会 二十年の歩み』

山形県高体連飽海地区登山部 1987年(昭和62年)

「SPOON 特集 鳥海山の山小屋」コマツコーポレーション 1996年11月号